

ある約束

初雪の降るころ、セルゲイは「待っていてくれ」とオルガに言い残して戦場に発った。

雪片が冬空に舞うように、二人のあいだにはいくつもの手紙が行き来した。

冬の厳しさが増すにつれ、セルゲイの手紙には過酷な戦場の惨状が綴られるようになった。

塹壕での慰めにと、オルガはセルゲイに小さなオルゴールを贈った。背中のネジを回すと「黒い瞳」の調べが流れた。

春が来て街路樹は新緑に包まれたが、セルゲイは帰ってこなかった。

短い夏の訪れとともに戦場からの便りは次第に滞るようになり、秋の深まりとともに完全に途絶えた。

オルガは来る日も来る日も泣き暮れた。

しんと雪が降りつづけるある日の夕方、一通の手紙が届いた。

親愛なるオルガ

私は砲弾の破片を浴びて盲目となってしまった。もう君の笑顔を見ることはかなわない。

私のことは死んだものと考えてくれ。

この手紙は知人に綴ってもらった。 故郷へ帰る途中で投函してもらおうから、探しても私にはいない。

君の幸せを願っている。

オルガは読み終る間もなく、消印の記された東の町へ旅立った。

町につくやいなや、幾日も幾日も足が棒になるまで街中を探し歩いた。しかし、セルゲイの手掛かりはどこにもなかった。

無一文になったオルガは沈黙のうちに帰郷した。そして冬のあいだじゅう、暗い部屋のなかにうつぶした。

大地からフキノトウの青葉が芽吹くころ、オルガはようやく顔をあげて立ちあがった。そして叔母の勧めで隣町に住む大工のもとに嫁いだ。

夫は物静かで仕事熱心な職人だった。

生活は決して楽ではなかったが、夫と力を合わせて朝から晩まで働いた。

2人目の息子が産まれた年に、ようやく東方での戦争は終った。

往来で人々が打ちならす悦びの鐘の音を、オルガは工房の奥から聞いた。

窓から外を覗くと町には傷付いた兵士らが列をなして戦場から帰還していた。しかし、どこにもセルゲイの姿があるはずはなかった。

間もなく戦争は、どこか遠い国のおとぎ話のように、人々の心から忘れ去られていった。

ある年の暮れ、夫は足をすべらせて教会の屋根から地面に転落した。オルガは夜通し介抱したが、美しい朝焼けのなかで帰らぬ人となった。

幼い息子らをかかえたオルガは、うなだれているわけにはいかなかった。そして夫の死後しばらくは残された工具を売って生計をたてた。

しかしそれも底をつくと一家は途端に生活に困窮し、子供たちの身なりは日に日にみすぼらしくなっていった。

見かねた叔母は息子たちを地主夫婦の養子にだすことを勧めたが、オルガは決して首を縦には振らなかった。

そして若いころに学んだ裁縫で仕立屋を始め、毎晩遅くまでミシンを踏みつづけた。

---

オルガは来る日も来る日も働きつづけ、数十年の歳月が夢のように流れた。

息子たちは立派な青年となり、同じ町から妻をめとった。

数年も経つとオルガのまわりは孫たちの賑やかな歓声に包まれるようになった。

ようやくオルガの唇にもときおり笑みが見られるようになった。

やがてその孫たちも少年少女となり、いくつもの春を経て少年らは背の高い青年に、少女らは髪の良い女性となった。

それと引きかえにオルガの髪は灰のように白く染まり、頬にはいくすじもの皺が峡谷のように刻まれた。

その目も最近ではぼんやりとしか見えなくなり、いつもストーブのそばで暖をとる日々を送っていた。

---

寒さの緩んだある冬の日、春に結婚を控えた孫娘がオルガのもとを訪れた。

オルガはいつものようにストーブのそばでうとうとまどろんでいた。

「お婆ちゃん、今日はとてもよい天気よ。たまには市場に行きましょう」ととまどうオルガを外に連れだした。

オルガは久しぶりに陽の日差しのもとにでた。

深く曲った腰を引きずりながら孫娘に手を引かれるさまは、老犬のようであった。

市場には色とりどりの果物や野菜がところせましと並び、広場では口から炎を吹く大道芸人に人々がどよめいていた。

その喧噪のなか、孫娘がふとつぶやいた。

「あら、綺麗な音色が聞こえてくるわ」

その言葉を聞いてオルガは立ちどまった。

遠くなった耳をじっと澄ますと、賑やかな歓声にまじってオルゴールの音色がかすかにオルガの耳朵をうった。

音のするほうを振りむくと、道の傍らに物乞いの老人がじっと座っていた。オルガはその老人の前にひざまずくと、箒のように皺がれた手でその顔をすみからすみまで探った。

老人の眼窩はふたつとも洞窟のようにえぐれていた。

老婆の頬には、とめどなく涙が流れていた。